

モンゴルの言語改革と英語教育

後 藤 田 遊 子

目 次

はじめに

- 1 伝統文字の復活と英語の導入
- 2 外国語教育目標と中学校英語教育
- 3 中学校英語教育の現状
- 4 モンゴルにおける英語教育の展望

おわりに

はじめに

モンゴルは1990年に民族の独立を達成した。ペレストロイカの波が社会主義国モンゴルにも波及し、民主化運動の嵐がおこったのである。1992年には新憲法を採択し、70年間におよぶ社会主義体制を放棄し、国名を「モンゴル国」に変えた。社会主義経済から市場経済への移行、一党独裁制から複数政党制への移行、言論の自由、宗教活動の復活、教育改革等、さまざまな民主改革が進行し、西側諸国との関係強化が進んだ。

教育改革において、モンゴル政府が重点的に行ったことは、モンゴル伝統文字の復活と英語の導入である。それまで、旧ソ連の強い影響力のもと、モンゴル文字はロシア文字（キリル文字）を使用し、外国語はロシア語が支配していた。文字の復活と英語の導入はモンゴルにおける言語改革であるといえる。しかし、市場経済移行による混乱はひどく、経済の混迷状態が続く中、伝統文字の復活は暗礁に乗っている。しかし、英語教育は紆余曲折しながら進展している。

本稿では、民主化後のモンゴル伝統文字の復活、英語の導入、中学校英語教育の現状と将来の英語教育の展望をおこなう。1999年9月に3週間にわたって、主にウランバートルで実施した調査に基づいて論じる。

1. 伝統文字の復活と英語の導入

教育改革の概要

1991年の教育改革の主な項目として次の5点を挙げる。

- ① モンゴル伝統文字の復活
- ② モンゴルの歴史・伝統・文化の見直し

- ③ 西側先進諸国の教育方式の導入と市場経済に対応した教育内容
- ④ 第2外国語としての英語の導入
- ⑤ 各学校における自由裁量、高等教育機関の自治権を認める

政府は1991年から学校の全てのレベルにモンゴル伝統文字を導入すること、1995年までには小学校の全教科をモンゴル伝統文字で教えること、モンゴル伝統文字の古典文学、教科書、本、新聞の発行と教師用指導書の開発、出版をすることを決定した。

伝統文字の導入と同時に、モンゴルの歴史・伝統・文化をカリキュラムに導入することが決められた。社会主義のイデオロギーによる歴史観を改め、普遍的な歴史観を歴史教科書に書き入れること、そしてモンゴルの歴史と文化を理解させる授業を設けた。

社会主義時代、中央集権的管理体制の元、全ての学校において同じカリキュラムに従った画一的な授業を進めてきた。県や町の地方学校での教育の独自性はほとんど認められなかった。しかし、教育改革において教育の地方分権化が進められ、地方の学校は中心的なカリキュラム以外にその地方にあった教育を施すことができるようになった。高等教育機関において、各大学、高等専門学校は独自の教育プログラムを開発することができるようになった。

教育改革にはアメリカ、日本等の西側先進諸国が教育方式や教科書作成、教授法、そして資金援助といった面で協力をしている。政府組織、NGO、その他の草の根団体が多数モンゴルの新時代を応援するために、多くの人材を派遣している。

モンゴル伝統文字の復活と挫折

モンゴル語はアルタイ語族を形成する1言語である。中国の内モンゴル自治区、北方のブリヤート自治共和国等で使用されている。非常に多くの方言があるが、その中でハルハ方言と呼ばれる言葉がほぼ全域で話されている。モンゴル語の伝統文字は「ウィグル式モンゴル文字」と呼ばれる。上から下へ、左から右へ行を追って記される文字である。正字法の複雑さ、口語と文語の違いの大きさ等で、非常に難解な文字とされている。1921年に社会主義革命が成立するまでは、この文字の使い手はモンゴル封建社会のわずか一部の人間だった。その頃の知識層はラマ教の僧侶で、一般遊牧民に文字を知る者はいなかった。モンゴル人民共和国政府は、新時代を築くために国民学校の建設に着手し、文盲を無くそうとする計画を立てた。

こうして、1931年にモンゴル文字をローマ字化（ラテン文字化）することが国民会議（ホラル）で決定された。この試みは、モンゴル独自の試みではなく、上記で述べたブリヤート・モンゴル語や方言の1つかルムック語がすでにローマ字化していたため、これにならったものと思われる。しかし、これによって難解なモンゴル伝統文字の問題が解決したわけではなかった。ローマ字化は単なるモンゴル文字の転写にすぎず、正確には写せない欠点と、文語と口語の問題も解決していなかった。さらに、ソ連の影響がますます強くなるにつれ、モンゴルのエリート達はソ連に留学をするようになり、ローマ字の使用が有利とは言えない状況になっていった。ローマ字を使用していたソ連

の各民族は、1930年代の後半になると、ブリヤート・モンゴル語やカルムック語も含めてローマ字からロシア文字（キリル文字）への移行に成功していた。

1940年の国家大会議で承認された憲法90条で、「モンゴル人民共和国公民は教育を受ける権利を有する。すなわち、無償で教育し、多くの一般教育（学校）、中等技術学校、高等専門学校を拡張・発展させ、学校では母国語で教育を行い、高等専門学校の学生には国家が奨学金を与えることによりこの権利を保障する」ことが決定された。1941年に政府は、不合理で学習に困難なモンゴル文字を、覚えるのに容易で話し言葉に近いキリル文字を基礎にした新文字へ移行することを決定した。ローマ字時代とは異なり人民政府はモンゴル新文字の浸透を徹底させた。当然ソ連の意向が強かったと判断できるが、強力な政策により、1963年までに簡単な文字しか読めない者も含んでいると思われるが、識字率が90%となった（モンゴル科学アカデミー2、1998：220）。しかし、民族固有の文字が無くなるということは民族のアイデンティティーの一部を失うということである。文字だけにとどまらずモンゴルにおける教育政策は全てソ連の教育をモデルにして作られ、教育内容もモンゴル民族の伝統、文化、歴史的教育は認められず、ソ連のイデオロギー色の濃い、画一的なものとなった。

教育改革はソ連の強い影響の元に禁止されていたモンゴルの伝統文化、民族のアイデンティティーを取り戻そうとする政治的配慮がなされた改革といえる。

先に述べたように、政府は1991年から学校の全てのレベルにモンゴル伝統文字を導入することにした。先の見通しを立てた上での導入であったかは疑わしいところであるが、民族運動の高揚のもと、なにが何でもモンゴルの民族の象徴である文字の回復を願った政治的意図が強かったように思われる。1995年までにはあらゆる分野において伝統文字を使用する決定がなされたが、経済混乱の長期化のもと、伝統文字の公用化の環境整備が整わないとの理由で伝統文字の復活は暗礁に乗った。キリル文字の効用が再認識され、1994年からは1、2年生でまずキリル文字を学び、伝統文字は3年生から8年生まで習うことになった。文字改革は挫折した状態で現在に至っている。

ロシア語の衰退と英語の導入

社会主義時代、ロシア語はエリート達にとって、必要不可欠な第2外国語であり、彼らはこぞってソ連や東ヨーロッパの大学へ留学した。外国の最新知識や技術はロシア語を通して伝達された。ウランバートル市内には、ロシア語のみで教育するロシア語学校があり、エリートクラスの親たちに人気があった。しかし、それまで唯一重要な第2外国語だったロシア語が民主化にともなって衰退し始めた。ロシア語学校の大部分は閉鎖され、モンゴル語で教育する普通の学校にかわった。民主化後、英語がロシア語に取って代わったのである。

モンゴルにおいて社会主義時代になされた専門的英語教育は、1955年にモンゴル国立大学（1942年設立）に英語科が設置され、わずか20名たらずの学生が英語を学んだ。その当時はロシア人が英語教師をしていた。1960年になると、最初のモンゴル人の英語教師が9人誕生した。その後イギリス人が英語教師として招かれている。1960年から1990年までの間に、モンゴル国立大学の英語科を

後 藤 田 遊 子

卒業した学生は約200名と言われている¹⁾。彼らの多くは英語教師、外交官、通訳、翻訳といった仕事に従事した。モンゴルは1961年に国連のメンバーとなっていることから、少なからず政治的にも英語を理解する人間が必要だったのである。現モンゴル国立大学の英語科長である Ts. Sumiya 氏は1964年にモンゴル国立大学の英語科を卒業した。その時の卒業生は15人だったという。1970年にイギリスに留学し応用言語学で修士をとって、それ以来30年近くモンゴル国立大学で教鞭をとっている。この当時の卒業生が数名今も現役で音声学や英文学等を教えている。

このように、限られた一部のモンゴル人だけが英語を理解する時代が1990年まで続いたのである。民主化後、モンゴル政府は英語が世界との交流を深め、西側諸国の先端技術を確保するために必要不可欠な言語として、1991年にモンゴルの中学校に英語を導入することを決定した。しかし問題は資格をもった英語教員の確保であった。この問題を解決するために、政府はロシア語教師に英語教師の資格をとらせるために英語教師養成プログラムを開設した。年齢が35歳までのロシア語教師がターゲットであった。この時、ロシア語教師たちは相次ぐロシア語学校の閉鎖、ロシア語の需要が今後ますます、英語に取って代わられる危機感を覚えていたと思われる。1991年から1992年の1年間に、アメリカの NGO 団体である ELI (English Language Institute) のアメリカ人教師たちが招かれ、ロシア語教師400人が養成講座を受けた (Mira, 1993)。1年間の養成講座を修了した教師は、1992年から政府が定めた、英語教育導入の学年、5年生に英語を教え始めた。これ以後、英語は中等教育から高等教育までのすべてのレベルにおいて必修選択科目となった。また、私立大学が増え、外国語学科に学生の人気が集まっている。社会人の教師養成講座が私立大学や大学付属の教育機関で開かれるようになった。このように英語教育が1992年から開始され、その当時5年生だった生徒は1998年に10年生になり、初めて卒業試験に英語を加えられたのであった。また多くの社会人が、ビジネスやリサーチ、教育、そして個人的必要性に迫られてであるが、英語に興味を持つようになりそのための英語講座が開かれている。現在、Peace Corps (USA)、VSO (Britain)、そして ELI (USA) といった組織が主にモンゴルで英語教育に貢献している。

2. 外国語教育目標と中学校英語教育

外国語教育の目標

1997年に文部省から「中学校から大学における外国語教育政策」²⁾ という法令が発令された。

政府は、民主化を遂げたモンゴルにおいて、国の発展の為に外国語教育は最重点政策であり、モンゴルの教育が世界レベルに達するように、全ての教育段階における教育基準を定め、学校のカリキュラム、教授法等を開発することを決定した。この法令は以下の点について言及している。

(1) 外国語教育の目的と目標

現代科学やテクノロジーに必要な資料や情報を得て使いこなすこと、日常的な外国語の技能を身に付けることといった目的を掲げている。

目標としては、生徒の興味や必要性、国の社会的現状を考慮に入れ、生徒が外国語の4つの技

能である speaking, listening, reading, writing を習得できるよう、カリキュラム、教授法の開発をおこなうこととなっている。

外国語教育は、母国語で話し、読み、書く力をつけた後の5年生から始める。

外国語の中でも、英語とロシア語が必修であるが優先順位は英語が上である。その他の選択外国語として国連加盟国の主要言語である中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、日本語、韓国語、トルコ語を国際語として学ぶことができる。

文部省の規約に従い、特別の許可をもらうならば、特別に外国語の集中授業がなされてもよいこと、英語かロシア語のいずれかを正規の科目にする事ができることが明記されている。

(2) 外国語のカリキュラムと教授法

- a 基礎教育レベルでは、日常生活という文脈で簡単なテキストを読めるようにする。
- b 中等教育レベルでは、科学、技術、政治、情報に関する簡単な文脈でより進んだ4つの技能(speaking, listening, reading, writing)を習得する。
- c 高等教育レベルでは、中等教育で習得した技能を高め、会話や記述によるコミュニケーション能力を養い、日常生活のみならず専門分野において外国語で自分自身を表現できるようにする。

外国語教育は通常のクラスの半分程の人数で行なわれ、外国語でのコミュニケーション能力を養う学習状況を与える。高等教育レベルでは、さらにカリキュラムや課題にしたがって自主的に勉強できるように指導する。

(3) 外国語教師に対する教育

外国語教師になるためにはモンゴルや外国の大学で教育を受け、資格をとる必要がある。

政府は教師養成機関を支援する。特に大学の英語科には優秀なモンゴル人や外国の専門家を当てる。現職の外国語教師を再教育し、外国語教育に必要な環境と新技術を導入する。また、内外の援助組織を効果的に活用する。

特に、不足する英語教師を多数養成するには、養成コースに多くの参加があって初めて実行可能である。中学校のロシア語教師は2－3年の夜間コースを受け、彼らのロシア語教育の技術と知識をいかして英語を学び、英語教師の資格をとることができる。通信コースに関しては、モンゴル国立大学、師範大学等がロシア語教師の英語教師養成を引き受けている。また、現職の外国語教師や外国語教育法の専門家はすべてその地方の教育センターにおいて現場教育を受けられる。地方の外国語教師不足に対処するため地方に必要な教師教育政策を実行して、教師離れを防ぐための労働、生活条件を開発する。

(4) 外国語教育のための必要条件

外国語教育に必要な指針を決定し、各学年の教育基準に合わせて教科書と教師用指導書を開発

後 藤 田 遊 子

する。その際、生徒の興味と能力、モンゴルの伝統や文化と世界の国々の文化との関連づけ、カリキュラムと教授法等を考慮に入れなければならない。また、現代のテクノロジーに見合うハイレベルな教科書の出版も必要とみなされる。

外国語教育のための教材や設備を中学校に備えるために、外国語教育支援プログラムの範囲内で、ある程度の専門的援助を受けることが必要である。

以上、法令の概要を述べたが、上記で述べられている政策で、特に重要な点はカリキュラムの開発と英語教師の養成及び再教育である。カリキュラムでは、特に外国語でコミュニケーションをする能力を高めるような教授法を求めている。不足する英語教師に関しては、英語教師の養成、特に地方の英語教師の養成と未熟な英語教師の現場訓練である。

初等・中等教育制度

初等教育は8歳からで、初等中等教育（普通教育）は4－4－2が基本的な教育区分となっている。1年生から4年生までが小学生、5年生から8年生までが中学生、9、10年生が高校生と考えればよい。8年生で義務教育は終了する。1998年度全国調査によると、小学校（1～4年生）96校、8年制学校（1～8年生）214校、10年制学校（1～10年生）320校、合計630校である。全生徒数は447、121名である³⁾。4学期制をとり、1学期は9月1日から9週間でその後2週間の休暇がある。同様に4学期まで9週間の授業と2週間の休暇を繰り返して6月の初旬に4学期が終了する。授業は40分の5分休憩が一般的である。学校不足もあり、多くの学校で、2部制をとっている。例えば1～4年生は午後の授業、5～10年生は午前中の授業というケースが多くある。4学期が終了すると、1～3年生は進級試験、4年生は小学校卒業試験、5～7年生は進級試験、8年生は義務教育卒業試験、9年生は進級試験、10年生は初等中等教育の卒業試験を受ける。モンゴルでは学校名は全て番号名である。例えば「15番学校」という具合である。文部省はその学校の裁量で、特別クラスを編成してエリート養成をすることを許可している。また、全学特別学校という学校も許可の対象としている。ウランバートルには23番学校という外国語特別学校（Special School for Foreign Language）がある。また、ウランバートルのある学校では数学に特に力を入れ人気を呼んでいる。

中学校英語（外国語）教育課程

外国語教育は5年生から始まる。文部省が決定した授業時間数は表1で表される。

表1 中学校の外国語授業時間数

	5年生				6年生				7年生				8年生				9年生				10年生			
学 期	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
授業時間数	4	5	4	4	4	4	3	4	3	3	2	3	3	2	2	3	2	3	3	3	3	2	3	2

出典：文部省法令 NO. 100-2、1998年より作成

生徒は英語とロシア語のいずれかを選択する。文部省の指導により、各学校には任意の選択授業時間数が決められ、その時間は学校の方針で特定の科目を自由に教えることができる。つまり、外国語を5年生より以前に教えることも可能だということである。現在のところ、ロシア語と英語の選択に関しては各学校にまかされている。

次に英語教育であるが、文部省の法令にも言及されているように、外国語でのコミュニケーション能力を養う学習状況を与える。つまり、従来の文法・訳読式教授法ではなく、日常的な社会生活の文脈の範囲でコミュニケーションをする、Communicative Approachを中心に4つの技能(speaking, listening, reading, writing)を習得するようなカリキュラムが奨励されている。しかし、英語教科書が整っておらず、文部省のカリキュラムに従った授業が各教師のくふうにまかされている現状である。英語教師は大半が元ロシア語教師で、1年間の英語教師養成プログラムを受講し、英語教師の資格をとった教師である。

3. 中学校英語教育の現状

文部省は外国語教育をロシア語と英語のどちらかを選択すること、しかし、英語が優先であるという政策を打ち出した。しかし、実態が政府の政策に追いつかない状態にあるというのが現状である。問題点を以下に挙げてみる。

- ① 英語教師の不足
- ② 英語教科書の不足
- ③ ロシア語の需要

まず、ウランバートルの2つの学校とモンゴル第2の都市ダーハンの1つの学校の英語教育の現状を簡単にまとめてみる。

9 2 番学校⁴⁾

(ウランバートル市内のはずれにあり、比較的貧困家庭が集まる地域にある。午前(5～10年)と午後(1年～4年)の2部授業を行っている。)

生徒数1300名、教師数46名、その内ロシア語教師3名、英語教師3名で全員女性である。英語教師経験年数は、2名が4年(44歳)、2年(32歳)で共にそれ以前はロシア語教師であった。他の1名は1999年に大学の英語科を卒業したばかりの新人教師である。1995年から5年生以上にロシア語か英語を選択させている。生徒の半数がロシア語、半数が英語を選択している。英語教科書は1998年まで、すでに使用停止となった英語教科書 Eye of Wisdom と Blue Sky I II、そして、外国出版の Head Way (Oxford University Press) のコピーを使用していたが、1999年度はアメリカのキリスト教団体 (Campus Crusade for Christ) から寄付された英語教科書を使う予定にしている。教科書は図書館所有で、授業時間のみ貸しだされる。教師は教科書以外に写真、ポスター、ゲーム、カセットテープ等を用意して、授業が受け身にならないよう工夫をしている。

3 番学校⁵⁾

(ウランバートル市内中央部にあり、生徒の質が良いという評判で、最近越境入学が増え、教室不足に悩んでいる。午前(5～10年)と午後(1年～4年)の2部授業を行っている。)生徒数2000名、教師数64名、その内ロシア語教師6名、英語教師2名(女性)である。英語教師経験年数は9年(40代)と1999年度が初年度(35歳)で共にそれ以前はロシア語教師であった。1998年度から3年生の1クラスだけ特別クラスを編成して英語を教え始めた。1999年度は5年生にロシア語か英語を選択させた。6年生以上は外国語はロシア語のみである。英語教科書は Eye of Wisdom である。この学校は英語を導入したばかりなので、初級英語の授業のみであった。教師は壁に貼ってあるポスターやカセットテープ、ゲーム等を使用している。

15 番学校⁶⁾

(ダーハン市内中央部にあり、最近小学生の入学が増え、高校生の教室不足に悩んでいる。午前(5～10年)と午後(1年～4年)の2部授業を行っている。)生徒数1600名、教師数60名、その内ロシア語教師6名、英語教師1名(女性、32歳)と Peace Corps から派遣されたアメリカ人教師1名である。英語教師経験年数は2年で、彼女は地方の私立大学の英語教育課程を終了し、ウランバートルにある国連の事務所に勤務していた。この学校は、1999年度から5年生に試験的に英語を教え始めたが、実は3年前からロシア語の教師が英語を課外授業として教えていた。英語教科書は Peace Corps から支給された教師用ガイドブックを利用し、アメリカ人教師の指導を得て行っている。

英語教師の不足

表2で示すように、ロシア語教師の数は毎年減り、英語教師の数が増えている現状である。ロシア語教師の減少率より、英語教師の増加率の方が多いのは、ロシア語教師が英語教師に移行しているばかりでなく、民主化後、大学に英語コースが増え、卒業した学生が英語教師になっていることである。

政府は、年齢35歳までのロシア語教師に、英語の集中プログラムを受講し、英語教師の資格をとるよう奨励している。ロシア語教師の英語教師養成プログラムはいくつかあるが、政府指定の機関である師範大学の附属機関の SED (School of Educational Development) は、現在、毎年21アイマグ(県)から年齢35歳までのロシア語教師が1名ずつ参加し、計21名で1クラスを設け、1年間のプログラムを通して英語教師養成をしている。前半期は文法をモンゴル人教師から1週間に1回4時間、コミュニケーション重視の英語をネイティブの教師から1週間に4回16時間にわたって学ぶ。後半期は、英語教授法をモンゴル人教師から学び、実習として中学校の授業参観、自分でレッスンプランを立てて実習授業を行う。それが終わると、文部省から正式に英語教師の資格をもらい、英語教師になることができる。資格をもらった教師たちは各アイマグへ戻って、英語教師となる。その他には、前述の ELI が独自のプログラムを用意し、先の SED を通して文部省から資格をもらうことができる。その他にモンゴル国立大学には通信コースが用意されている。また、地方の教育センターでも養成コースを受講することができる。

まだ若いロシア語教師たちは年々ロシア語のクラスが減っていく実情と、活発になっていく英語

モンゴルの言語改革と英語教育

の需要に対処するために、ロシア語教師としての将来の不安、つまり職を失う恐れから、何とか早く英語を修得しようと努力しているのである。

現在のところ表2からも分かるように、英語教師の絶対数は不足している。ウランバートルでは、英語教師が218人、ロシア語教師が325人であることから、ウランバートルには英語教師が加速的に増えている現状がある。この数は、大学を新たに卒業してくる英語教師が増えることによって、今後数年でロシア語教師の数を追い越すであろう。そこで起きてくる問題は深刻に思われる。

大学で英語コースを修了した若者は、筆者のような外国人にどんどん英語で話しかけてくる。中学校や大学の英語の授業をいくつか参観したが、大学を出て、まだ1～2年という英語教師が中学はもちろんのこと、私立大学でも教鞭をとっていた。ある私立大学の教師はなるべく英語で授業をする努力をしていた。一方、ロシア語教師から英語教師へ変わって3～4年の英語教師は、なかなか英語で会話をするというところまでは実力が伴っていない。将来、中学校から英語を学び、大学で英語教育を受けた英語教師が増えるにしたがって、現在のロシア語教師のための英語教師養成という試みは暗礁にのるであろう。しかし、地方には英語教師は集まらない。ロシア語教師から英語教師に移行したばかりの未熟な英語教師でも教鞭を取らざるをえない状態である。

表2 モンゴル21県とウランバートルにおける、ロシア語、英語教師数の変化
(1998年度は学校数、5～10年生のクラス数を含む)

年 度	1995年度		1996年度		1997年度		1998年度			
教 師 数	ロシア語	英語	ロシア語	英語	ロシア語	英語	ロシア語	英語	学校数	クラス数(5～10)
教師総数	1,374	324	1,385	377	1,180	382	1,015	565	630	6594
アルハンガイ	52	9	43	20	43	15	29	31	29	232
バヤンウルギ	61		52	7	42	8	34	19	35	230
バヤンホンゴル	35	20	41	18	28	22	17	36	25	212
ボルガン	38	8	38	10	27	15	30	14	25	169
ゴビアルタイ	35	1	29	6	29	6	28	11	27	196
ドルノゴビ	29	5	27	6	27	4	24	10	19	155
ドルノド	53	5	52	6	42	10	34	8	25	236
ドンドゴビ	26	8	33	5	22	6	19	12	19	139
ザブハン	64	13	51	16	40	15	37	15	34	271
ウブスハンガイ	55	10	46	11	40	10	32	18	31	245
ウムヌゴビ	30	1	30	4	26		21	5	20	139
スフバートル	31	6	27	7	21	8	20	9	16	141
セレンゲ	66	19	70	22	67	15	59	13	31	348
トウブ	55	13	53	10	39	19	37	22	32	309
ウブス	50		45	4	31	6	28	9	28	207
ホブド	47	3	44	6	39	2	36	7	21	242
フブスグル	58	5	71	4	60	7	46	18	30	286
ヘンティ	40	1	43	2	37	6	35	11	29	228
ダルハンオーラ	68	21	69	23	81		44	36	18	298
ウランバートル	415	160	443	174	360	192	325	218	90	1945
オルホン	48	10	57	12	63	9	61	16	16	240
ゴビスンベル	11	2	11		10		8	1	5	48
その他	7	4	10	4	6	2	9	12	5	74
私立学校						5	2	14	20	4

出典：Information, monitoring and assessment department of MOSTEC, January 1999より作成

各地域の教育センターでは、こうした教師の現場教育を外国の援助団体から派遣された英語のネイティブ・スピーカーに依頼している。ネイティブ・スピーカーたちは彼ら独自の教師用指導書を配付したり、さまざまな英語の教授法を使ってモンゴル人の英語教師の指導をしている。しかし、現実問題、優秀な英語教師はウランバートルを離れたがらない。地方でも英語の力がついてくると都会のウランバートルへ引っ越してくるという状況である。そうすると、現状のロシア語教師から英語教師への養成は地方においては、今後も続いていくであろう。

文部省は2005年までに英語教師を2,000人まで増やそうと考えている⁷⁾ ようである。教師の給料の低さと、ウランバートルでは教師以外で英語を生かした職業につくチャンスが多いことから考えると、今後、英語教育を充実させるには、教師の給料（生活）保障という点も考慮していかなければならないであろう。

英語教科書の不足

教科書問題は深刻である。筆者がウランバートルへ滞在していた9月、モンゴルの新学期に新英語教科書は間に合わなかった。政府に教科書を印刷する予算が無いのである。ひたすら資金提供者を待っている状況だった。モンゴルでは民主化以来、経済状況の悪化から、紙不足が続いている。基本的に、教科書は図書館から貸し出し、あるいは教科書をコピーして生徒に購入させ間に合わせている状態である。学校によっては、外国の援助団体から教師用の指導書、教材としてのポスターやカード、絵本等を寄付してもらい、授業に活用している。

民主化後、モンゴルで最初に登場した中学校英語教科書は、5年生用の Eye of Wisdom で、アメリカの NGO で、現在も引き続きモンゴルで英語教育に貢献している ELI (English Language Institute) が作成し、10,000部を寄付した。Blue Sky I、II（5～7年生用）はイギリスと文部省との提携によりできた本で、本の作成にはイギリス政府の要請で、ケンブリッジにある Bell Educational Trust が全面協力し、印刷、出版はモンゴル政府が行う形で進行した。モンゴルの英語研究者4名がイギリスへ出向き、セミナーを受けて作成した。4名とも中学校での英語教育の現場経験が無いままに作成したため、難しすぎるとの批判が多く出た。Blue Sky I は50,000冊、Blue Sky II は10,000が印刷された。しかし、Eye of Wisdom は1992年に使用停止、Blue Sky I、II は1994年に使用停止となった。以後、教科書が定まらないまま1999年にいたった。

1999年2月に英語教科書作成プロジェクトチームが編成され、モンゴル国立大学 (National University of Mongolia)、ESPI (English for Special Purposes Institute)、外国語大学 (University of Liberal Arts)、師範大学 (State Pedagogical University) とその附属機関 SED (School of Educational Development) から10名の教師がチームの構成員となって、9月までに5～9年生の教科書が作成された。これらのテキストは上記のチームが作成し、イギリス人の専門家にチェックしてもらう形式をとった。9月に入ってイギリス人の専門家がウランバートルを訪れ、モンゴル人のチームと出来上がったばかりの5年生の教科書のチェックをした結果、手直しする箇所が多いため今回出版を見合わせる事となった。6～9年生のテキストは出版資金提供者が見つかり次第、印刷、出版する予定となっている。

1999年になって、モンゴル人で英語教授法の専門家、Namsrai Mira氏が独自に作成した English in Topics が出版され、文部省から使用許可がおりた。これは7年生以上の中級レベルの教科書である。Mira氏は先に述べた英語教科書作成プロジェクトチームの一員でもある。この教科書は SED を通して購入され、主にここで英語教師養成プログラムを受講した英語教師が使用している。

上記の6～9年生の新英語教科書が発行され、各学校で使用開始となり、さらに改善を加えてモンゴルにおける中学英語教科書として確率するにはまだ時間がかかりそうである。

ロシア語の需要

教師不足、教科書の不整備が示す事実は、筆者が訪問した学校はほんのわずかな数にしかすぎないが、まだ英語教育が完全に普及していないことをはっきりと物語っている。筆者が訪問したダーハンの15番学校の校長は次のように語った。ダーハン市はロシアに近いので、ロシア語の需要が英語より多かったことと、英語教師の不足と経験不足によりこれまでは、英語を導入することを控えてきた。しかし、英語教育をしていないという評判がたつと入学者が減る恐れが出てきたので1999年度から英語教育を開始することにした。

教育改革がなされ、市場経済と西側諸国との関係強化を意識した教育への移行過程にあるモンゴルにおいて、5年生で英語かロシア語を選択する段階で、単純に英語を選択することが生徒に有利に運ぶかどうかは、現在の時点では微妙な問題である。大学教育において、最近ではモンゴル語で書かれた文献がかなり出回っているが、それでもロシア語の文献は依然使われている。また、当然英語の文献、テキストは今後ますます普及していくであろう。初等・中等教育段階で英語、あるいはロシア語のいずれか一方の外国語しか勉強していない学生にとっては、大学生になってから、いずれにしても有利、不利ということが起きるだろうというのが現時点の状況である。

言語的に見ると、ロシア語は文章構造が英語と同じである。一方アルタイ語に属するモンゴル語は日本語、朝鮮語と似通っているため、日本人が英語学習の際におかすような間違いを犯しやすい。モンゴル語的発想から英語を学ぶより、ロシア語的発想から英語を学ぶ方が容易である。ロシア語教師がたった1年間の英語集中訓練によって何とか英語教師として教壇に立つことができるのも、語学教師としての実績と、ロシア語と英語の類似性が役に立っているといえる。

最後に、モンゴルは民主化後にロシアとの関係が途絶えたわけではない、相変わらず経済関係は続いている。まったくロシア語の需要が無くなったわけではないことも付け加える必要があるだろう。

4. モンゴルにおける英語教育の展望

本稿では、高等機関や外国語学校での英語教育に触れることはできなかったが、私立大学が1995年の60校から1998年には98校にまで増え、英語コースを選択する学生の数が増えている⁸⁾。Sumiya教授は、モンゴルでは、大学生から社会人まで、英語の必要性を重要視しているのはもちろんのことであるが、近頃は英語を勉強することが流行となって、一種の英語ブーム現象が起きていると語っている。こうした現象は、確かにアメリカを代表する西側諸国の自由な風潮が若者を魅了し、

英語はそうした流行の先端をいくものとしてとらえることができるであろう。いずれにせよ、モンゴル人が英語を勉強するにあたって、モチベーションが非常に高いことが指摘される。

人口約240万人、その内の約4分の1がウランバートルに集中しているモンゴルにおいて、今後ますます英語の必要性が高まるならば、特に都市における英語教育が発展していくと思われる。その理由を以下に挙げる。

- ① 高い動機
- ② ロシア語の影響
- ③ コミュニケーション重視の英語教科書
- ④ 政府の奨励 —— English Olympics

第1は上記で述べたように、現在、モンゴル人には英語の必要性に対する強い認識がある。

第2に、モンゴルの英語教育を考える時に、社会主義時代の70年間におよぶロシア語の影響を考慮せずにはいられない。その間、中学校における外国語はロシア語であり、大学ではロシア語で授業をするように指導された時もあった。もちろんテキスト、文献はロシア語で書かれたものが大半だった。つまり、モンゴルにおいて外国語を学ぶことの必然性と修得のための努力は、既にロシア語で体験しているのである。この体験がロシア語教師が英語を短期間で修得する際に役に立たないはずはない。高い動機と過去に外国語を修得した経験により、ある意味では、社会主義時代にロシア語教育を受けたモンゴル人にとっては、第3外国語となる英語は、第2外国語を学んだ時より早いスピードで修得できるであろう。次に、外来語としての英語の単語がロシア語を通してモンゴル語に浸透している例がある。1920年代の始めに、初めて国立銀行ができた時に、`bank`が導入された。これはちょうど英語のバンクがロシア語で導入されたと同様のことであった。同様に、radio, telephone, museum, motorcycle, taxi, television, theater, telescope, microscope 等も、そのまま翻訳されずに使われたものである。これらの言葉はあまりにも早く国民に浸透したために、モンゴル語に翻訳する暇が無かったとも言える。これらの語の発音は英語的発音ではなく、モンゴル語ないし、ロシア語の発音で使われる。外来語が母国語の発音で理解されているため、英語的に発音することに苦勞するという点では、日本語における外来語の問題と類似している。いずれにせよ、既にモンゴル社会で外来語としての英語が入り込んでいることは、英語を学ぶ際に都合がよい。

第3に、英語教授法であるが、英語が導入された時点からアメリカやイギリスから英語教育をするために多くのネイティブ・スピーカーがモンゴルを訪れ、具体的な英語教授法を指導した。その教授法は Communicative Approach であった。文部省もこの教授法を取り入れ、英語でコミュニケーションができるようになることを優先する指導方針を出して、英語教科書作りが始まった。既に使用停止になった教科書は全て、生徒が中心になって活動する内容である。生徒が単独で、あるいはグループやペアを組んで練習や課題をやりとげるレッスンがふんだんに盛り込まれている。これらの教科書にはすべて、教師用指導書がついていて、新米の英語教師はこの指導書にそって授業をすすめることができるようになっている。1999年中に出版予定である、6～9年生用の教科書作成プロジェクトチームの一員である Mira 氏によると、これらの教科書も同様の教授法が取り入れられ

ているということである。

日本の中学校英語教育も、ずいぶん以前から Communicative Approach が重要であるとさげばれ、現場教師がゲームや教室内のアクティビティーを活発にする方法をくふうしている。しかし、今だ、受験英語や従来の文法・訳読式指導法から抜けられないジレンマを持ち続けている。将来、モンゴル人の英語教師がこの教授法を熟知し、モンゴルにおけるコミュニケーション重視の英語教授法が軌道に乗り始めた場合には、両国間の英語教授法の比較検討をすることも有意義かと思われる。

第4番目に、English Olympics にふれる。1996年度から始まった国内の中学校生徒の英語コンテストで、1997年の文部省法令によって、生徒や教師の英語力を養う目的で政府から参加を奨励されている。

テスト内容は、listening, writing, reading の能力をためすものである。それぞれの大会で1日ないしは2日間にわたって実施される。現在のところ外国の援助団体の支援を得て実施している。

参加者は8年生（6、7年生でも参加できる）が主である。コンテストは、1. 各学校内で選抜試験 2. 21のアイマグ大会で各アイマグ1名にしぼる。（ウランバートルは9地区に分けて9人選んで2回目の試験で4人にしぼる。）3. 全国大会、となる。1998年度は、1999年の1月に学内選抜、2月の終わりに各アイマグ、そして4月21日に全国大会を行った。全国1位は生徒1名、担当教員1名、2位は生徒2名、担当教員2名そして全国3位は生徒3名、担当教員3名という内訳で表彰される。これら上位入賞者は、モンゴル国立大学、外国語大学、師範大学に入試免除で入学を許可される。

このようなコンテストは、他の教科に関しては社会主義時代から現在まで行われていて、科目によっては、大学入学金、学費免除というケースもある。文部省は1996年に英語のコンテストを行うことを決め、生徒や教師の競争意欲を高め、生徒のみならず、教師の教育意識と英語の質を高めようという試みをしている。

以上、モンゴル英語教育の展望を述べたが、これからのモンゴルの英語教育の発展は、英語教科書の開発はもちろんであるが、まずは、英語教師の質の向上にかかっていると言っても過言ではないだろう。

おわりに

民主化直後のモンゴルでは、伝統文字の復活によって民族のアイデンティティーを取り戻したかのように見えた。しかし、現在のところ伝統文字の復活は暗礁に乗ったままである。ロシア語から英語への移行が進む現在、モンゴルの言語改革は英語の導入ということであったと考察できる。今後、モンゴルにおいて、かつてはロシア語が担っていた役割を英語が担うことになるのである。外国からの情報、最新知識や技術が英語を通して入手され、英語を通して身に付けられ、さらに外国とのコミュニケーションの手段として英語が確立されていくのであろう。そのために、国をあげて英語教育に取り組んでいるのである。

英語が導入された時点から、Communicative Approach という教授法が採用された。日本では、こ

後 藤 田 遊 子

の教授法が一般に受け入れられ始めたのは英語教育100年の歴史の中では最近のことである。モンゴルにおいて、導入からまだ10年未満の Communicative Approach が、今後のモンゴルにおける英語教授法として確立していくかどうか、ひとつのモデルケースとしてとらえることができる。今後の進展に目をむけ、さらに研究調査を実施したい。

<謝辞>

本稿は、師範大学の招聘を受けて1999年8月28日から9月18日までの3週間にわたって行った現地調査に基づいて執筆したものである。師範大学の Mijid Yunden 氏、Namsrai Mira 氏、モンゴル国立大学の Ts. Sumiya 氏、文部省の Nerendoo Nergui 氏には貴重なご教示を賜りました。ここに記してお礼をもうしあげます。また、モンゴル滞在中の通訳、翻訳は友人の Badralmaa Yunden さんにお願ひしました。

注

- 1) モンゴル国立大学英語科長の Sumiya 氏が、筆者のインタビューに答え、社会主義時代の英語教育の話しをしてくれたものをまとめたものである。
- 2) 1997年9月10日発令、文部省法令 NO. 252「学校教育全レベルにおける外国語教育政策に関して」より抜粋、要約する。
- 3) 文部省1999年1月発表より引用する。
- 4) 92番学校の校長 Tseyenpil Surmaajav 氏より話しをうかがった。
- 5) 3番学校の教務主任より話しをうかがった。
- 6) 15番学校の校長 Shugarsurengeen Jadamsuren 氏より話しをうかがった。
- 7) 文部省 Nerendoo Nergui 氏より話しをうかがった。
- 8) MOSTEC MONGOLIA 1998. 10. 14より引用する。

参考文献

- N. Mira Observations and Suggestions for English Language Teaching in Mongolia.
SECONDARY SCHOOL ENGLISH TEACHING JOURNAL Volume 1 Number 3. English Language
Institute Ulaanbataar 1993
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所 監修 田中克彦 訳者 二木博史他
『モンゴル史1、2』 恒文社 1998年
- 日本・モンゴル友好協会編 『モンゴル入門』 三省堂選書 1993年
- 小長谷有紀編 『アジア読本 モンゴル』 河出書房新社 1997年